



島根県雲南市の地域医療

城西大学経営学部教授 伊関友伸

雲南市立病院を訪問

2023年9月15日、島根県雲南市にある雲南市立病院を訪問した。雲南市立病院は、1948年3月に島根県農業会により「雲南共存病院」（50床）として開院された。1961年には大東町外9ヶ町村雲南共存病院組合に移管される。1989年に「公立雲南総合病院」に名称変更が行われる。2011年には市町村合併の影響で雲南市、奥出雲町、飯南町の1市2町で構成していた病院組合を解散。雲南市立病院として、雲南市（現在人口約3万5千人）の単独経営となった。15の診療科、職員数422人（うち医師35人、2023年4月現在）、281床（一般155床、地域包括48床、回復期リハ30床、療養48床）の病院として、雲南地域の住民の命を守っている。2019年10月には、新病院改築事業を完了している。雲南市立病院はかつて深刻な経営危機に

直面したことがある。2004年に導入された新医師初期研修制度は病院に大きな影響を与え、2009年4月には17人に半減した。医師退職により医療収益が大幅に減少し、当時の病院組合の手持ち現金は枯渇する。その後、雲南市立病院は職員が一丸となって病院の経営再建に取り組んできた。

病院を訪問して最初に見つけたのが、玄関に掲示されていた「地域医療日本一を目指す」のスローガンであった。スローガンは、写真1のようにバッジにもなっており、職員の皆さんが身に付けておられた。「すごいこと言うな、この病院」というのが正直な感想であった。

地域医療人材の育成

経営再建に取り組んだ雲南市立病院が最も力を入れたのが地域医療人材の育成であった。「地域に必要な医療人は地域で生み、

育てる」として、「地域医療人育成センター」が設置された。島根大などの医学生、島根大学病院、島根県立中央病院、国立病院機構浜田医療センター、府中病院（大阪府）をはじめとする県内外の病院から研修医を受け入れている。2021年度の実績は医学生38人（延べ86週）、研修医20人（延べ21月）に及んでいる。最近では長期間の研修生を優先的に受け入れており、医学部5年生が6年生においても研修参加、医学生が研修医として研修参

写真1 職員がつけているバッジ



加というリピーターが増加しているという。病院には研修者を受け入れるため、院内に研修室が設けられ、宿泊施設も完備している。

医師だけではなく看護学生、薬学生などの医療関係学生の実習も積極的に受け入れており、2021年度の受け入れは約60人に及ぶ。また、将来の医師、看護師などの医療者を育てるために小・中・高生の体験活動も積極的に受け入れている。高校生は医療現場体験や一日助産師体験などに約150人が参加、中学生は「夢」発見ウィークや一日看護体験などに約50人が参加、小学生はふるさと教育などに約200人が参加している。

総合診療医の養成

医師の大量退職で最盛期に10人在籍した内科医が2人まで減少したことに対応するために、2010年に「地域総合診療科」が創設され、外科医2人が「総合診療医」の名の下に、内科患者の外来を担当し、在宅医療にも積極的に関わって病院機能の維持を図った。2016年には、総合診療が中心となり持続可能な地域ケア体制の構築を図るために「地域ケア科」を創設し、指導医を招へいした。2023年現在の地域ケア科は指導医2人、専攻医8人の体制となっている。地域医療人材育成や総合診療医養成の試みもあって、2023年4月の常勤医師数は35人（うち地

域枠医師3人）となり、2002年4月の34人を超える在籍者数となっている。

住民と共に歩む病院

雲南市立病院の特徴は地域住民による地域医療活動が盛んなことがある。病院では「がんばれ雲南病院市民の会」と「市立病院ボランティアの会」が結成されて活躍している。市民の会は、地域住民を対象とした研修会、サンキューメッセージ、受診の便利手帳、着任医師歓迎会などの活動を行っている。ボランティアの会は、毎日の病院玄関での車いす介助、定期的な敷地内の草刈り、花壇、生け垣などの整備、病院内の美化などの活動を行っている。病院を訪問した時、たまにボランティアさんによる月1回の草刈り活動をされているのを拝見した。

また、広域的な視点で雲南地域医療を考える会が、奥出雲町、飯南町を含めた「雲南の地域医療を考えるシンポジウム」を2006年から開催している。筆者が病院を訪問したのは、翌日に開催された第16回シンポジウムで講演をしたことによるものであった。

病院も、積極的に住民への情報発信に努め、「市報うんなん」に毎月4ページ「雲南病院だより」を掲載しているほか、ケーブルテレビでの番組放送、出演、フェイスブックを活用している。地域の病院として住民と共に

歩むことは当然のことであるが簡単なことではない。

島根から帰ってきて、「地域医療日本一を目指す」とはどういうことなのかについて改めて考えてみた。「地域医療日本一」の実現には、病院職員、住民、議会議員、市役所職員など、地域に住み働く全ての人が、良い医療を実現するために必要なことを考え、できることを行っていくことが大切なのだと考える。全ての人の努力の結果が「地域医療日本一」に近づいていく歩みになるのである。これからの雲南市立病院および雲南市民の皆さんの地域医療に関する取り組みに期待をしたい。

筆者プロフィール

伊関友伸（いせき ともし）

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究分野は行政学。総務省「持続可能な地域医療提供体制を確保するための公立病院経営強化に関する検討会」構成員など、数多くの国・地方自治体の委員を務める。著書に『人口減少・地域消滅時代の自治体病院経営改革』（ぎょうせい2019年）、『新型コロナから再生する自治体病院』（ぎょうせい2021年）など。